







さい。

「高等師範では、最初は全員無段扱いで、一年生の終わりに昇段審査をやって、高等師範の段を決めていました。武徳会三段だったのが四人もいましたが、初段に認められたのが十五人中二人だけ、あとは全員一級止まりでした。その初段のうちの一人が、中野八十二君でした。僕は陸上、中野君は水泳の選手でもあったから、揃って異端者扱いされたけど、私たちは兄弟のように仲が良かったんですよ」

学校独自の段位認定について聞いた。

「それは高等師範だけかと思っていたら、武専(武道専門学校)でも同じだったようです。昔は、先生方が自分の手でちゃんと教えて、段位をつける。そういう精神だったんでしょな」

次は稽古内容について伺いました。

「稽古は午後二時から五時までの二時間、全部の先生が出てこれ、稽古をつけてもらいました。

高野佐三郎先生は七十歳前ぐらいで、主任教授でした。私は毎日、先生に掛かっていきましたが、先生はぱつと構えて、じつとして動じないんです。私だけ剣先の前でぐるぐる回されて、どうにもこうにもならない。ふうふういいながら、『ありがとうございました』と言うのが精一杯でしたよ」

当時、関東と関西では、稽古つぷりが違ったという。

「武専、高師、国士館にそれぞれ剣風がありました。武専は大技で、担いで打つ。高師は応じ技で、応じて勝つ。国士館は突きから技を出して攻める。だから、道場で何百人一緒に稽古していても、あ



教職員大会で。前列左端・中野八十二氏、3人目・井上氏

れは武専だ、国士館だとすぐわかりましたよ」

高等師範には、他に理論家の菅原融先生、学生にとつて精神的な支えだった佐藤卯吉先生、森田文十郎先生と、錚々たる指導陣が揃っていたといふ。

「私は四年間、寒稽古にはいつも一番乗りでした。四週間続く寒稽古で、朝五時から始まるところを、四時半までには必ず行っていました。

それは、佐藤卯吉先生が、私が陸上競技もやることに、常に理解をもってくれて、いつも『心してやりなさいよ』と情けある言葉をかけてくれたからです。それが嬉しくて、ありがたくて、佐藤先生のためにも頑張ろうと、人より先に行つて稽古しました」

——高等師範の剣道で得たことは何ですか。

「剣道では名を残したものが何にもないんです。た

だ、卒業する時は四段を貰いました。それは、なんでも真面目に一所懸命やっているから、四段に認めようということだったんでしょね。剣道で誇りに思っているのは、初段から範士まで、すべて一度で合格したことですよ」

良い姿勢で、張りのある大きな声が続く。

「その頃、各府県の武徳会支部、高師、武専、国士館、警視庁と陸軍戸山学校だけは、それぞれで四段まで認めていましたが、五段からは武徳会でしか貰えませんでした。

私も高等師範を卒業した翌年、京都の武徳会に行きました。一週間講習を受けて、最後の日が昇段試験でした。講習会の稽古では、武専の先生が見て回って評価をされるんですが、それはもう、みんな一所懸命ですよ。

そして最終日、試験会場に行くと私の名ともう一人の方の名前が張り出されていて、横に『右兩名受験に及ばず』とある。『受験に及ばず』って、受験させないってことですよ。これは大変だと思って、武専教授の佐藤忠造先生に、どういうことですかとお聞きしたら、『君は受験しなくても合格だ』と。これにはもうびつくりしましたね。稽古を毎日見て、先生方が力があると認めたんでしょう。高等師範の教えのお陰でしょね」

高等師範卒業後は、地元・福岡の筑紫中学へ。以降、剣道の指導者としての道を歩む。

——剣道の指導で大事なことは何でしょう。